

「忘れられた人」 櫻痴 福地源一郎伝

松澤 君江

一、「十大先覚記者伝」矢野竜溪は云う

明治七、八年、明治十七、八年までの十年間が福地の全盛時代であり、「実にその頃の世の中の如何なる事でも、一事一物皆日日新聞の福地君の論説に左右されぬものはない。」と云う程に勢力があった。(中略)

「欧米の長を採ろうとすれば、日日新聞の福地君の論説を見なければいけない」という風に、「新聞の論説が世の中を引廻した時代は私の生涯において見たことが無い。」とまで云われた福地が、存命中にもかかわらず「忘れられた人」と云われたのは何故か。徳富蘇峰から「能文家、雑学博士、世熊人情博士の三つが新聞記者の三条件であり、福地ほど其の資格を具備した人は稀れである。」と云われたのに。天才福地には大きな欠点があった。

彼は自信過剰で、さらに風流情事にすぎたことである。これが為に大臣、華族を棒にふたといわれる。「国家の利器を擁しながらか、か不遇に終るな」と忠告した大久保甲東の言も、福沢諭吉の、「宮仕えせず子弟を養え」との忠告も、彼のためには役立たなかつた。(福沢と櫻痴は江戸の森山多吉郎塾で出会っている)

佐賀の乱、征台の役が起つた明治七年福地は「東京日日新聞」に入社、三十四才であった。東京日日新聞は明治四十四年に大阪毎日新聞社と合併、昭和十八年から「毎日新聞」となつて現在に至っている。



若き日の福地櫻痴
「三代言論集」第3巻より

二、おいたち

櫻痴は長崎の人・幼名八十吉、天保十二年三月二十三日(二八四二)、長崎・新石灰町(現八坂町)に生る。父は苟庵、医師で、学問も深く漢学の師も兼ねていた。苟庵四十六才、母松子三十八才、すでに六人の女をもうけてい

たが、八十吉が初めての男子であり、八十吉を源一郎と改名されたのは十六才の時であった。

天保十四年(二八四三)八十吉三才の時、祖父が亡くなり、家が火災にあい、翌年本石灰町に移る。その頃より漢学を父から教えられ、五才からは読書習字を修め、七才で長川東州の門に入り専門的な漢学を学んでいる。

当時の長崎は学問に対して自由な雰囲気があり、士農工商を問わず聖堂をはじめ家塾・寺子屋等へ入ることが出来、各自の意向に委せて修学することが出来た。ことに八十吉の少年時代は、長崎聖堂のもっとも盛んな時期であった。

安政元年(二八五五)八十吉十四、五才。日本はアメリカ、イギリス、ロシア、フランス、オランダと相ついで和親条約を結び、鎖国から開国への道をおし進め、幕府が長崎に海軍伝習所を設けたのもこの頃で、幕府や各藩では優秀な人材を選び、オランダ士官より海軍及び航海、砲術、測量、算術などを学んでいる。父苟庵も時代の流れを察知し、源一郎と改名した八十吉に蘭学を学ばせる事とし、オランダ大通詞名村八右衛門のもとに入門させている。

安政三年十二月(二八五六)源一郎はオランダ通詞の名村姓になるが、わずか一年余りで再び福地姓にもどっている。

翌安政四年五月(二八五七)源一郎は長崎奉行所よりオランダ稽古通詞を命ぜられ、出島オランダ商館に出役。この時、源一郎は西洋に新聞というものがあることを知った。

オランダ人は年々長崎に渡来する時、風説書を長崎奉行に差出し、海外の事情を報告。奉行所ではその風説書をオランダ通詞に渡して翻訳させ、その翻訳を幕府に差出していた。名村は源一郎が稽古通詞になつてからは、口授翻訳の筆記を源一郎に命じていた。

そこで彼は西洋には新聞というものがあつた、新聞は毎日の刊行で自国は勿論、他国の時事を読者に知らせることになつて来たことを知った。そのおかげで、出島のカピタンは長崎にいながら、海外の情報を知り風説書を作ることが出来たのである。

風信

○今月は何はともあれ花見の宴等を自粛し、被災された方々に哀悼を捧げる可きであります。

○本会でも追悼の意を兼ねて、つい先月、昔より唐船によつて多く中国方面に輸出されていた俵物(ナマコ・鮫ヒレ・アワビの干物類)の生産地調査のため三陸方面の海岸を訪ねられた本会の竹之下先生の「有りし日の、東北地方の心あた、まる数々のお話」を中心に懇話会を開催。今更ながら同地と長崎との深い関係を教えていただいた。この時、諫早の中村さんがわざわざ「自宅で造られた手製のカステラをお供えして戴いた。有難うございました。」

○寛政四年(一七九七)の「長崎歳時記」をみると四月の行事は先ず「七日家に棹竹にツツジの花をゆひ付け家の軒さきに押たて八日のお釈迦の花まつりに手向ける」より始まつている。

○続いて四月下旬ごろより「ハタあげ」はじまると記し、ハタの種類を图示しバラモン・蝶バタ・あごばた・こうもりばた・えび尻等の図が記してある。「又俗につるわかしという事あり」と説明を加えている。これが現在の「長崎のハタ合戦」となつたもので「此の時には多くあごバタを用る」とあり「合戦の時には根よまの先にビイドロをつける」と記してある。

○四月二十日は「お太師様」の日、「家々を廻りお接待の桃饅頭」を戴く。
○四月二十四日は「復活の日ですよ」と浦上の友人から電話があつた。子供の頃、私は其の友人の家で戴いた「ふくれ饅頭」が、おいしかった事を今も覚えている。

○国宝崇福寺檀家惣代藩氏より四月二十五日は媽祖様の誕生日で、日本に残る唯一の中国福建古式の行事を残している媽祖祭を今年も四月二十五日開催するので参詣にこないかと案内をうけ出席予定。

○天理大学教授齊藤純先生来訪され、先生が研究されてこられた「迷子のしるべ石」について教えて下さつた。この石碑の初期の物は「奇縁水人石」と言い、其の「水人石」の一つが仙台藩医棟方玄洋の記録により嘉永三年(一八五〇)には長崎にもある事を教えて戴いた。

○今月は二冊を御寄贈いただいた。野村美術館研より『茶の湯研究誌』と有名な『野村研究紀要二〇号』

『新釈犯科帳・長崎奉行所判例集』(安高啓明著) 非常に参考になる本でした。長崎文献社刊(三、〇〇〇円)

安政四年八月源一郎は長崎飽ノ浦製鉄所の伝習掛を申し付かり、オランダ士官と伝習生の間に立つて種々通訳するという事が主な仕事であつた。ここで、彼は海軍伝習生の優秀な青年達と出会うことになる。

安政五年九月(二八五八)源一郎は外国船掛を命じられる。十二月軍艦頭取矢田堀景蔵に伴われ咸臨丸に乗つて海路江戸へ渡航。この時、父苟庵は我が子の前途を案じ、江戸の知己や朋友にあてた紹介状を沢山持たせたといい。上京した源一郎は、以来、徳川の御家人となり、文久元年(二八六二)の遣欧使節に随行、次いで明治新政府になつた時には役人となり明治四年の岩倉使節団に随行。其の後計四回も随行を命じられている。その後新聞記者、劇作家などを経て衆議院議員に当選。明治三十九年没・六十四才。葬儀は芝・増上寺で盛大に行われ墓は谷中にある。

三、人間櫻痴

福地の生涯をたどる時に問題となるのは、その「変節」ぶりである。江戸に来て早々に榎本武揚らが、源一郎を連れて吉原の中萬字屋へ登楼している。うぶな櫻痴は翌朝八橋という相方の女郎に手をつけて「昨夜はありがたう存じました」と札を述べたという。これがやみつきになり、以来吉原通いの優等生となつたと言う。

櫻痴という雅号は吉原の味をしめて、「櫻路」という名妓に熱くなり、悪友達が彼の渾名を「おうじ」といつた。そこで自らも櫻痴と号するようになったという。「おうち(貴方)にぞこん迷つてしまった愚か者という意味でもあるという。

櫻痴は日本経済新聞の創始者の一人でもあり、一橋大学の創立にも関係している。一橋大学(商法講習所)の始まりは銀座の鯛みそ店の間借りから始まり今日に至り、其の学校の看板は櫻痴の筆である。

櫻痴は長崎の旧師森山多吉郎の没後、其の遺族が困つてるのを聞き、其の子栄之助を引取つて、浅草に葉屋を持たせたという。人情もろい櫻痴の二面である。

「三代言論集」によれば、津田仙は櫻痴の風流ぶりを苦々しく思つていたが、佐高信氏によれば櫻痴は遊蕩しても里子夫人を泣かせず、几帳面に小遣帳をつけていた事には感心させられたし、「転身」「変節」を繰り返した櫻痴ではあつたが、もとはそういう性格の男ではなく、彼は性来下戸で酒の席には大福餅を持ち込んでいたという。それが御家人となり、いろいろの出来事でもまれ、おのずと性格が歪んだのであろうと言う。櫻痴の生涯は政治家の反面教師として、視点の大切さを教えているとも記されている。

(長崎歴史文化協会理事)

長崎歴史文化協会研究室

TEL 八二二一 一五四〇
十八銀行公会堂前出張所 2F

